



カンムリウミスズメと門川の住民との関わり

濱田秀一

庵川漁業協同組合（宮崎県東臼杵郡門川町）

摘要

宮崎県東臼杵郡門川町の枇榔島は、カンムリウミスズメ *Synthliboramphus wumizusume* の世界最大の繁殖地と言われている。このカンムリウミスズメは、1975年に地域を定めない国の天然記念物に指定され、また環境省の絶滅評価基準では絶滅危惧Ⅱ類（VU）に指定されているが、以前（1970年頃まで）は門川町でも枇榔島だけでなく他の島や地磯にも生息し、住民にとって、とても身近な存在であった。

カンムリウミスズメと門川町の住民との関わりについて紹介する。

キーワード：カンムリウミスズメ、生息地、卵、利用、捕食者

はじめに

私は門川町で生まれ育ち、1969年から父の元で漁業を始めて47年が経つ。現在は4代目となる次男と共に門川町庵川漁協で魚の養殖と定置網漁をしている。

今回、論文を書いている専門家の皆さんのように、カンムリウミスズメについて研究や調査をしたことはないが、自分自身が小さい頃から見えてきたこと、聞いたこと、また、体験してきたことを紹介したいと思う。

カンムリウミスズメの生息地

まずはカンムリウミスズメの生息地について、私が小さい頃は枇榔島のほかに、小枇榔、マツバエ（図1）、大谷の地磯にもいたと記憶している（図2）。

年配の方の話の聞くと（右松 私信）、乙島の南側にもいたのではないかとの情報もあるが、こちらは定かではない。なお、大槻氏も、岩田氏から乙島でも卵をとっていた話をきいている（大槻 私信）。

また、大槻氏の論文にも書かれているが（Otsuki 2013）、昔は、枇榔島の東側に大型定置網が敷いてあり、潮がはい時など網が上げられない時には、枇榔島の岩陰に船を置き、漁師の皆でウミスズメの卵を獲りに上陸していたという話も聞いたことがある（横井・岩田 私信）。実際、私も小さい頃、枇榔島に上がり、巣の中に恐る恐る手をつこんだ記憶がある。巣穴の中に手を入れる時は、子どもながらに、ヘビやムカデがいるのではないかと恐ろしい思いをしたものである。小枇榔や大谷の東側の地磯では、岩の割れ目の間に巣を作っていたのを覚えている。

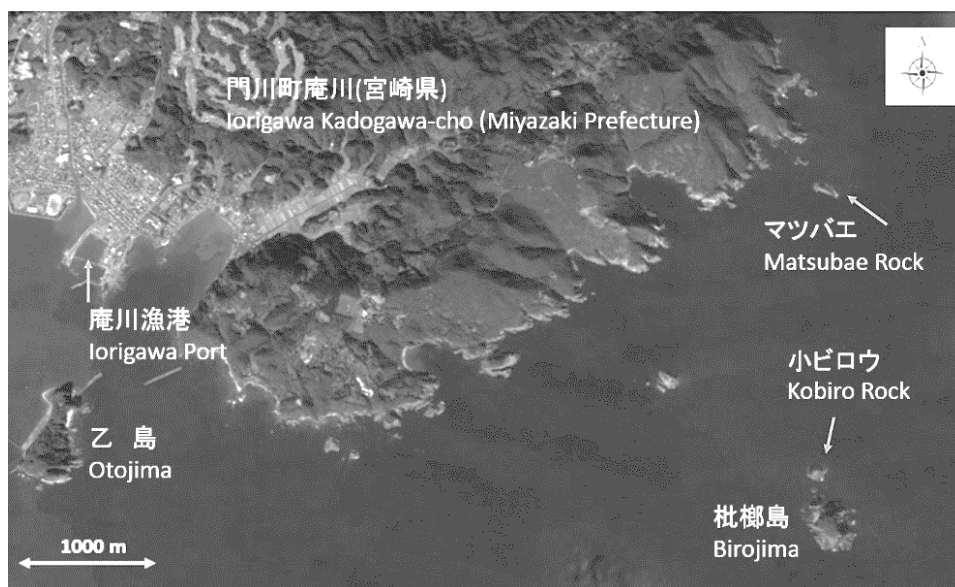


図1. 以前、庵川漁港周辺でカンムリウミスズメが生息していたと思われる箇所
Fig.1. Historical colonies of Japanese Murrelets around Iorigawa port and Otojima

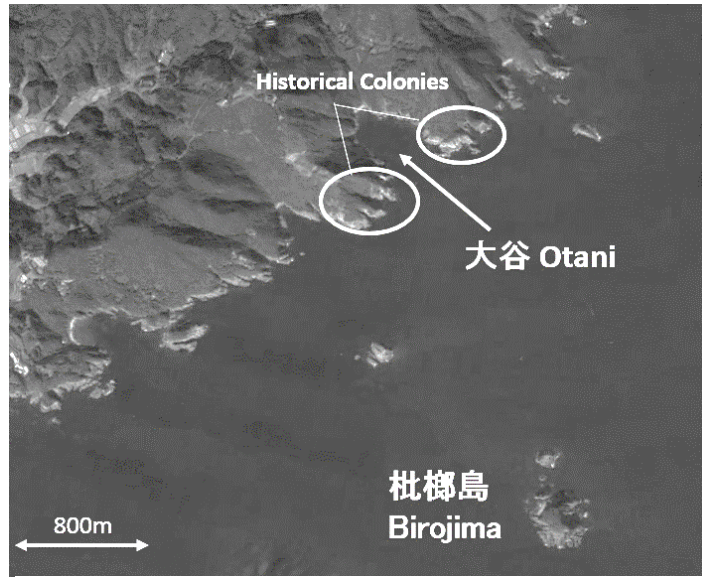


図 2. 大谷の地磯の位置
 Fig. 2. Location of historic mainland colonies in the Otani area, Kadogawa, Miyazaki Prefecture

生活の中のカンムリウミスズメ

母たちの話によると、終戦の頃には、牧山に住んでいる人たちがビニール袋にウミスズメの卵を入れて、よく売りに来ていたようだ。その頃は、卵は重要な栄養源であり、また貴重な収入源であったことがうかがえる。大槻氏の論文中の松田氏の話によれば、卵売りが販売していた価格は、1個 1~2 円程度であったということである(Otsuki 2013)。

私が子どもの頃には、親父の船に飛び込んできた親鳥を持ち帰り、一緒に浜で泳いでいたことを今でも鮮明に覚えている。地元では、カンムリウミスズメのことを「ウンスズメ」と呼び親しんでいた。現在のように貴重な鳥という意識はなく、誰も気にする者がいなくらいカンムリウミスズメは身近な存在だった。10 年程前までは、乙島付近に敷いている定置網にも小魚を食べに来る姿をよく見ていたが、最近ではそういう姿もあまり見られなくなってしまった。

カンムリウミスズメの脅威と今後の課題

大槻氏他が 2016 年に、自然保護基金の助成成果報告でものべているが、昨年、枇榔島近くでイノシシが 2 頭泳いでいるのを漁師が発見し、1 頭は捕獲したが、1 頭は行方不明となり、後日、海上で死んでいるのが見つかった。30kg 位の体重はあったかと思うイノシシだったが、このイノシシがそのまま枇榔島に上陸していたら、カンムリウミスズメにも影響があったかもしれない。そう思うと、自分たち漁師としても、地元の住民として監視することは重要なことだと実感した。



図 3. 漁の様子
 Fig. 3. Pictures of fishing and foraging seabirds



また、最近、報道や研究者の方の発表で、カラスがカンムリウミスズメを捕食したり卵を食べたりしているという話を聞いた(大槻他 投稿中)。釣り人が残した撒き餌がカラスを引き寄せている可能性があるとのことだった。私たちとしても、地元の漁師や渡船業者の方たちに協力してもらい、カラスの増加を防ぐ方法など、カンムリウミスズメを守るための方法を考えなければならないのではないかと考えている。

また昔のように、船を出せばそこにはカンムリウミスズメが泳いでいる・・・そういう風景が見られることを願う、今日も漁に出る(図 3)。

謝辞

調査に協力していただいた右松一徳氏、横井満男氏、岩田勝利氏には、この場を借りて御礼申し上げます。また、Abstractの英訳をしていただいた、大槻都子氏、S. Kim Nelson氏にも感謝いたします。

We are very grateful for the information provided by Mr. K. Migimatsu, Mr. M. Yokoi, and Mr. K. Iwata. We also thank for Ms. K. Otsuki and Ms. K. Nelson for their help with English translation.

引用文献

Otsuki, K. 2013. Historical colony harvesting, at-sea hunting, and local fishing bycatch of the Japanese Murrelet at Birojima, Miyazaki-ken, Japan. *Pacific Seabirds* 40(2): 59-69.

大槻都子, Harry Carter, 中村 豊.(投稿中). 宮崎県枇榔島におけるカンムリウミスズメの最大の捕食者, カラス類, に関する基礎調査. 自然保護基金助成結果報告書. 公益財団法人 自然保護基金

Stories of Kadogawa residents living with Japanese Murrelets.

Shuichi Hamada

Iorigawa Fishery Cooperative: Kadogawa-cho, Higashiusuki-gun, Miyazaki-ken, Japan

Abstract

Birojima in Kadogawa Miyazaki Prefecture has the world's largest colony of Japanese Murrelets (*Synthliboramphus wumizusume*). This species has been designated as a “national monument” by the Japanese government since 1975, and “vulnerable” (i.e., at high risk of endangerment in the wild) by the Japan Ministry of the Environment. They used to inhabit not only Birojima but also other islands and mainland areas in Kadogawa, so they were a common species for town residents to see.

Key words: Japanese Murrelet, Breeding site, Egg, Utilization, Predator